

# 婦人部の交流活動をとおして

～浜のくらし体験事業、農業グループとの交流から私たちの活動を考える～

大津漁業協同組合婦人部  
部長 伊藤 善子

## 1. 地域と漁業の概況

私たちが所属する大津漁協は、茨城県北部の北茨城市に位置し、古くから漁業を基幹産業として発展してきた。常磐高速道路により首都東京からの交通事情も良くなったこと、一昨年前に五浦海岸に天心美術館がつけられたことなどで、北茨城へ観光に来るお客さんも多くなってきた。

大津漁協はまき網漁業の基地であるとともに、小型船による沿岸漁業が非常に盛んな地域である。現在の漁業の形態は、大中型まき網6か統、小型底曳船5隻、5トン未満船約100隻となっている。水揚げされる魚種は、まき網で漁獲されるイワシ、サバ、小型底曳船によるヒラメ、カレイ等の底魚、船曳網によるシラス、コウナゴ、オキアミなどがある。

## 2. 婦人部組織の概要

私たちの婦人部は昭和33年に結成され、現在、部員は62名、部長以下役員13名が中心となって、活動を行っている。部の運営は、各部員の年会費、組合からの助成金、婦人部の事業収益によりまかなっている。

婦人部の主な活動は、組合組織と一緒に取り組んでいる健康診断、貯蓄推進、共済推進、海難遺児募金等の活動のほか、漁港内の清掃活動（7～9月）、廃油を利用した石鹸作りなどを実施して環境面の改善にも努めている。また、魚食普及活動の一環として、市の産業祭である「雨情の里港まつり」において「イワシのつみれ汁」を無料で配布したり、町の小学校において子供たちに魚のさばき方を教えるなど、多面にわたる活動を行っている。その他、平成11年には、北茨城市のイベント「浜のくらし体験」事業に参加し、都市部の女性に漁業者の生活を体験してもらった。また平成13年からは、同じ市内の農業グループとの交流を始めた。

## 3. 活動選定の動機

今回は私たちの交流活動について紹介し、交流をとおして私たちが考えたことについて発表する。

### ①「浜のくらし体験」事業

平成11年に北茨城市のイベントとして「浜のくらし体験」事業が企画された。この事業

は、都市部に住む若い女性に、私たち漁家の女性のくらしを体験してもらい、漁業や海への理解を深めてもらうという趣旨で行われた。大津漁協の婦人部と青年部はこの主旨に賛成し、共同して事業に参加することにした。婦人部では、なるべく私たち女性の普段の生活を知ってもらうため、ホームステイを中心とした体験事業に取り組むこととなった。

#### ② 北茨城市の農業生活改善グループとの交流

大津は漁業の町である。10数年前にイワシが豊漁だったころ、私たち婦人部は北茨城市内の農村の人たちに、イワシを無料で配布したことがあった。それと併せて、農家の人たちからは、自分たちで作っている野菜を持ってきてもらうという交流を行った。当時のことを覚えている人たちから、「おいしい新鮮な野菜が食べたいね」という声を聞くことがある。そんな中、ある会議で北茨城市農業生活改善グループのリーダーである大友さんと知りあい、機会があれば交流会をやりたいねという話がもちあがった。

### 4. 実践活動の状況及び結果

#### ① 「浜のくらし体験」事業について

この事業には東京、神奈川、栃木から3名の女性が参加した。そのうち2名を大津漁協で、1名を同じ市内の平潟漁協で受け入れることになった。体験事業は3泊4日の日程で行われ、参加者は夜の宿泊を除き、婦人部員の自宅でお世話することにした。参加した女性は、朝4時30分に起きて、5時には私たちと一緒に出漁する船を見送った。その後、漁業者の自宅で朝ご飯を食べ、洗濯、掃除など普段私たちが行っている家事を一緒に手伝ってもらった。船が入港するころには、長靴、カッパを着て陸回りの仕事を体験してもらった。船から魚の入ったカゴを下ろして市場に並べる作業では、初めての体験なのでとまどいもあったが、婦人部と一緒に楽しみながら漁業に従事する女性の仕事を体験してもらうことができた。

体験事業が終了した後で参加者をお願いしたアンケートには、漁業に対する印象として、活動的であり、サラリーマンと比べても割合もうかる仕事であると感じた、と書かれていた。また、女性の仕事については、参加する前にはかなり重労働と思っていたが、早朝の出漁準備、市場での水揚などの漁業独特の仕事の他は、食事・洗濯などの家事仕事を中心に、考えていたよりも大変な仕事ではないと感じたということだった。「事業に参加して何を得ましたか」という質問には、女性の労働、漁業について理解できたという答えが返ってきた。また、大津や平潟についての印象として、住んでみたい町、人情が厚く、良い人・親切な人が多いという回答が書かれていた。事業に関わった私たちとしては、「大変だったけれどやってよかった」という気持ちでいっぱいになった。

#### ② 北茨城市農業生活改善グループとの交流

交流会を開くにあたり、農業生活改善グループの人たちと話し合いの場を持つことにした。両グループの役員が集まり話し合った結果、よい機会なのでぜひ交流活動をやってみましょうということになった。それぞれお互いに自分たちの仕事をもっているので、交流活動により無理がかからないよう、長く続けられるような形を考えていきたいと思いますということになり、まずは農業グループの皆さんに、かねてから希望が多かった「野菜の直売」をお願いすることになった。

9月の第3日曜に第1回の野菜直売を行った。朝7時に改善グループのみなさんの軽トラック4台が大津漁協前の広場に到着すると、待ちかねていた婦人部員がいっせいに新鮮な野菜に集まった。この野菜直売による交流は、その後も月1回のペースで続いている。

農業グループからは、魚のおろし方やおいしい魚料理の作り方を教えて欲しいという要望が強い。そこで、魚のおろし方、漁師自慢のお総菜などを紹介する料理講習会を開くため準備・計画しているところである。

## 5. 波及効果

私たちが「浜のくらし体験」を実施して思ったことは、都市部に住む人たちに水産や漁業のことをもっと積極的にアピールしていくべきではないかということであった。最近ブルーツーリズムという言葉をよく耳にするが、今回のような交流をとおして、海や漁村の良いところをもっと知ってもらうことにより、私たち自身の地域の振興がさらに図られるのではのではないだろうか。初年度の交流会がきっかけとなり、平成12、13年は青年部が主体となって、交流会を中心とした体験事業を開催した。私たち婦人部は前年の経験を生かし、準備や当日の手伝い等を積極的に行った。平成12年には、参加した女性が大津の漁家へ嫁いでくれるというおめでたい話もまたまった。

生活改善グループの野菜を売ってもらうことに関連して、婦人部の中で「食べ物に対する意識調査」を行った。「スーパーなどで野菜や肉・魚を買うときに気をつけることは？」という問いに対して、新鮮さが33%と最も多く、次いで値段、安全性が25%、産地表示13%となった。また、「産直販売に最も期待すること」は、新鮮さ(68%)、売る人の顔がわかる(18%)、値段(14%)。「産地等の表示がある商品について」という問いには、そういうものを選んで買う人が20%、関心がある人が46%と、ほとんどの人が気をつけていることであることがわかった。また、「大津・北茨城産といった表示を付けたいか？」という問いに関しては、86%がやってみたいという回答であった。食べるものに関しては新鮮・安全・安心といったこととともに、作った人、獲った人がわかることがこれから大切になってくるのではないだろうか？地元のおいしい魚を安心して食べてもらうこと、魚食普及を続けていくことの大切さを感じた。これからの水産は、こういったことをもっと意識し、アピールしていくことが必要だと思う。

## 6. 今後の課題

これらの交流活動をとおして、私たちは水産、漁業をもっと一般の人たちに理解してもらう活動が必要だと思った。今後はそのようなことを頭において、私たちの婦人部活動を考えていきたい。私たちができるところから活動を広げていきたいと思う。

# 「浜のくらし体験」での様子



市場での水揚げ  
作業の体験

作業の合間に婦人部  
のみんなと一緒に



ホームステイをし  
た漁業者の家での  
だんらん

# 農業生活改善グループとの交流の様子 (野菜の産地直売)



軽トラックで運ばれてきた新鮮な野菜

それぞれ自分で  
作った野菜を販売  
してもらおう



生花も販売された